

# 国際社会学部—南アジア地域（アフガニスタン・パキスタン）

## 世界最大のムスリム（イスラーム教徒）集住地域

南アジアは推計で 6 億人近くものムスリム人口を抱える、世界最大のムスリム集住地域です。世界全体の全ムスリム人口の 4 割近くがこの地域に集中しています。南アジアの西から東に広がるアフガニスタン、パキスタン、インド、バングラデシュにかけての地域にムスリム人口が特に集中しています。歴史的には、西から到来したイスラームの影響を受けて、10 世紀後半にアフガニスタンに成立したムスリム王朝ガズナ朝や 12 世紀に入りガズナ朝から自立化したゴール朝が現在のパキスタンからインド、さらにはバングラデシュに至る地域に地盤を築きました。さらに、現在のインドの首都デリーを中心としたことでデリー・サルタナト朝（1206 年～1526 年）と呼ばれる五つのムスリム王朝が長期に渡り北インドを中心に勢力圏を拡大し、南アジアのイスラーム化と土着の言語や文化との融合が促進されました。さらに、南インドのデカン高原などを中心とした地域にもムスリム政権が興隆し、16 世紀には南アジアの大部分を版図に収めたムガル帝国（1526～39 年、1555 年～1858 年）が成立しました。この歴史的過程を通じて、南アジアのムスリム社会は政治・社会・経済・文化から言語の面まで、周辺地域からの様々な影響を受容しつつ、独自の発展を遂げました。さらに、19 世紀中盤にイギリスによるインド帝国、いわゆる「英領インド」が成立すると、イギリス支配下における影響を受けつつも、ムスリムによる内発的かつ多様な政治・社会運動が生じ、1919 年にはイギリスの保護国であったアフガニスタンが、1947 年には南アジアの「ムスリム国家」としてパキスタンがインドと分離して独立しました。さらに、1971 年にはバングラデシュがパキスタンから独立して現在に至っています。近年のアフガニスタン・パキスタンは、戦乱や治安の悪化、イスラーム主義の台頭といった負のイメージが常に付きまといますが、世界屈指の人口稠密地域に多様なエスニシティが共存し、様々な言語・文化を包摂する地域です。



本学ではパキスタンの国語であり、インドの主要言語の一つであるウルドゥー語を学びながら通じて、両国を中心にしつつも、ウルドゥー語の影響下で広がる南アジアのイスラームやムスリムの歴史・文化などについて幅広く学ぶことができます。さらに、関心に応じてこの地域で用いられる他の諸言語も習得が可能です。近い将来に世界最大の宗教人口を抱えるイスラームと、世界の人口の 1/4 を占める南アジア双方について学ぶことは、グローバル化と相互理解が必須のこれからの世界を知る上で必須であるのみならず、必ずや様々な学びの刺激を与えてくれるでしょう。



## アフガニスタン・パキスタンの自然と地理

### 地理（自然景観）

アフガニスタンからパキスタンにかけては、ヒンドークシュ山脈やカラコルム山脈といった山岳地帯が広がり、パキスタン北部に位置する K2 は標高 8,611m を誇ります。パキスタン中央から西部にかけては、スレイマーン山脈が広がり、アフガニスタン中央部にはコーハ・バーバー山脈が広がります。アフガニスタンからパキスタンにかけては、これらの峻険な山岳地帯を水源とする様々な河川が流れています。アフガニスタン北部を流れ旧ソ連邦を構成した中央アジア諸国との間に流れるアム河、アフガニスタン西部の主要都市ヘラート近郊を流れるハリールード川、首都カーブル付近を流れパキスタンに至るカーブル川、パキスタンの豊かな平原地帯であるパンジャーブ地方を流れる 5 つの川とそれらが合流しアラビア海に注ぐ大河インダス河などがその代表です。パキスタンは南部にアラビア海が広がり、海を渡るとオマーンやアラブ首長国連邦、サウジアラビアなどの湾岸諸国が位置しています。他方、インドとパキスタンとの間にはタール砂漠が、パキスタン南部にはチョーリストーン砂漠が広がり、アフガニスタン南部にはレーギスターン砂漠が広がるなど、砂漠も多数存在します。

気候は多様で、平野部では夏の厳しい暑さと強い日差しに見舞われるが、山岳地帯の夏は過ごしやすい気候であるが、冬には時に積雪を伴う氷点下 20 度以下の厳しい寒さとなります。



パキスタン北部フンザ地方（「風の谷のナウシカ」の原風景？）



グワーダル遠景（パキスタン南部・アラビア海を臨む）



北ワズィーリスターン・ミーラーン・シャー近郊（パキスタンのアフガニスタン国境付近）

## 人と文化

### 言語

#### 【パキスタン】

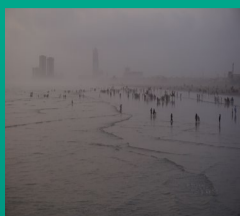
国語としてウルドゥー語が採用されており、ほぼ全員が理解し話すことのできる接続言語として機能している。しかし、パキスタンにおけるウルドゥー語母語人口は全人口の1割にも満たない。各地域では様々な言語が用いられ、多様性あふれる文化を育む土壌ともなっている。ウルドゥー語と同様、インド・ヨーロッパ系言語に属するインド・アーリヤ系のパンジャービー語、スィンディー語、サラエキー語などがその代表であり、これらの諸言語は主にパキスタンを北から南に縦断して流れるインダス河の東部地域で用いられる。他方、インダス河西側に広がる地域では、インド・ヨーロッパ系言語に属するイラン系諸言語であるパシュトー語やバローチー語や、ドラヴィダ諸語に属するブラーフイー語なども用いられ、北部山岳地帯では様々な言語が用いられている。

#### 【アフガニスタン】

公用語としての地位を占めているパシュトー語とダリー語（アフガニスタンのペルシア語）に加えて、中央アジアで用いられるテュルク系言語、ウズベク語やトルクメン語などが北部地域を中心に用いられ、南部ではバローチー語やブラーフイー語などが用いられる地域もあります。他方、長期に及ぶ戦争や内戦の影響を受けて国外に避難していた難民たちの多くは、ウルドゥー語を理解し話すこともできる。

## 魅力あふれる都市たち

### カラチー کراچی



ジンナー廟

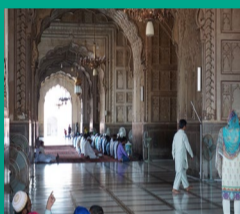


カラチー中心部

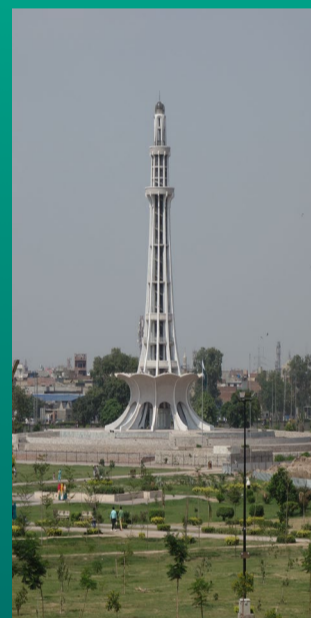
パキスタン最大の都市であり、同国南部スindh州の州都であるカラチーは、イギリス統治時代に重要な港町として大きく発展しました。パキスタンが成立した1947年には臨時首都とされ、インドから流入したムスリムの「避難民」(ムハージル) たちが数多く流入しました。このため、カラチー市内ではウルドゥー語を母語とする人々が多く居住しています。また、市内の人口は1700万人以上、都市圏人口を含めると2000万人以上もの人口を抱える世界有数のメガ・シティでもあります。

パキスタン東部パンジャーブ州の州都であり、推計で1300万人以上の人口を抱えるパキスタン第二の都市です。歴史的には、中央アジアやアフガニスタンからインドに至るまでの戦略的要衝として、また重要なムスリム都市として繁栄しました。ムガル帝国期には一時的に首都が置かれたこともあり、市内にはバード・シャーヒーモスクやラーホール城などの歴史的建築物が今も多数残されています。また、ウルドゥー文学の一大拠点として、多くの文人が活躍した都市でもあります。

### ラーホール لاہور

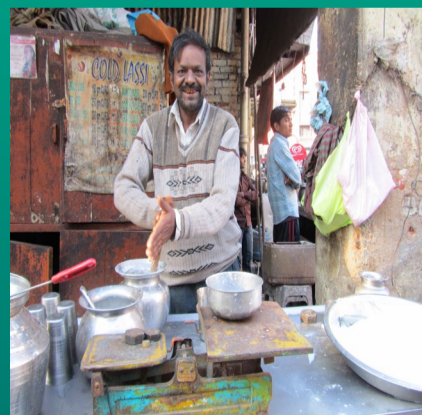


ラーホール中心部



パキスタンの塔

### デリー دہلی



旧市街のラッシー屋



ラール・キラ (赤い城)

インドの首都が置かれるデリー首都圏は、官公庁が置かれているニュー・デリーと旧市街を中心としたオールド・デリーに分けられます。デリー旧市街地はかつて南アジアのムスリム王朝として繁栄したムガル帝国の王城であったラール・キラが位置するとともに、ムガル帝国期のモスクや街区も存在しています。パキスタンの国語であり、南アジアのムスリムたちの「共通言語」でもあるウルドゥー語の「発祥の地」でもあります。

## カーブル کابل





旧王城  
バーラー・ヒッサール







市内中心部  
ティームール・シャー廟


18 世紀後半にアフガニスタン首都となり、以降アフガニスタンの政治・経済・文化の中心地としての機能を果たしてきました。標高 1800m という高地に位置することから、夏は涼しく過ごしやすい気候ですが、冬は氷点下 20 度以上もの厳しい寒さと積雪に見舞われます。市内中心部にはカーブル川が流れ、ムガル帝国の創設者であるバーブルの墓廟庭園も市内に残されています。

アフガニスタン国境に隣接し、パキスタン北西部ハイバル・パフトゥーンフワー州の州都であるペシャールは、その地理的位置からアフガニスタンからの影響を色濃く受けてきた都市です。市内ではアフガニスタンの主要エスニシティでもあるパシュトゥーンの言語であるパシュトー語が日常的に用いられ、装いや料理、人々の思考にも独自性が見られます。旧市街の賑わいと迷路のような構造も特徴的です。

## ペシャール پشاور

旧市街  
キッサハーニー・バーザール



イスラミーヤ・カレッジ

## イスラマバード اسلام آباد





市内中心部




ファイサルモスク

1960 年代にパキスタンの新しい首都として建設された計画都市がイスラマバードです。パキスタン連邦政府の官公庁や最高裁判所、各国大使館が置かれており、パキスタン政治の中核機能が集中しています。近郊の都市ラーワルピンディーと一体的な都市圏を形成しており、その人口は 300 万人以上にも達します。

## 南アジアのイスラム社会の歴史的展開

南アジアのイスラム社会は、7世紀にアラビア半島で勃興したイスラム勢力による侵入にはじまり、その後数百年をかけて、現在のアフガニスタン、パキスタン、インド、バングラデシュに至る地域において徐々に形成されていきました。この過程で、南アジアにはアラブ、イラン、テュルク、アフガンなど様々な人々が流入し、在地の人々との間での人的交流を通じて、言語・文化・社会などあらゆる側面での融合が生まれました。

南アジアにイスラム政治権力の勢力が拡大すると、その統治下では政治・文化面を含め、公用語・文学語としてペルシア語が用いられ、南アジアのイスラム統治下の諸王朝は「ペルシア語文化圏」に包摂されました。さらにその強い影響下、北インドを中心とした地域で土着の語彙、あるいは周辺地域の諸言語との相互作用を受けつつ発展した言語であるウルドゥー語が広く用いられるようになりました。

ムガル帝国をはじめとするイスラム諸王朝の統治下では、南アジアのイスラム文化を象徴するモスク、聖者廟、庭園などを含む多種多様な建築がなされ、イスラム都市が各地に見られるようになります。さらに、18世紀以降には、北インドを中心にイスラムによるイスラム改革運動が開始され、イギリスの支配下においても、この動きはよる活性化し、ウルドゥー語を媒介とした知的ネットワークが南アジアのイスラムを結びつけ、様々な政治運動の核となっていきます。

一連のイスラムによる政治運動の結果、南アジアの「イスラム国家」として（現在のバングラデシュを含む形で）1947年に成立した国家がパキスタンです。また、1919年にイギリスの保護国から独立したアフガニスタンも、南アジアのイスラム改革運動や思想、政治・社会運動の多大な影響を受けてきました。2021年8月にアフガニスタンの政権を掌握したターリバーン暫定政権は、まさにこの証左とも言えます。

## 現代社会の諸問題



ムザッファラバード（パキスタン実行支配地域の中心地）

### カシミール問題

1947年にインドとパキスタンが分離独立した際に、両国間での帰属問題が最も表面化したカシミール地方をめぐって、両国間での激しい対立が現在も続いている。

### アフガニスタン内戦と難民

1979年末の旧ソ連軍の軍事介入以降40年以上にわたり続いた戦争・内戦、さらには政治的混乱は様々な混乱と荒廃をもたらしました。長期にわたる戦乱がもたらしたアフガニスタン難民の問題も深刻です。



ペシャーワルのアフガニスタン人居住地区